
緋弾のアリア ～黒き疾風～

Aberu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア ～黒き疾風～

【Nコード】

N1022Y

【作者名】

Aberu

【あらすじ】

空から女の子が降ってくると思うか？

とある事情で1年のとき東京武偵高に転校してきた、杉崎 誠はその日神崎・H・アリアと出会う。
そこから彼の非日常が始まる。

プロローグ 運命の出会い

空から女の子が降ってくると思うか？

少なくとも俺、杉崎^{すぎさき まこと} 誠はそうは思わない。

そんなのは普通じゃない異常事態に決まっている。

だから空から女の子なんか打ってこなくていい、武偵である俺はそれお見過ごすことなどできないから。

ある日突然それは起こった。

「この自転車には爆弾が仕掛けてありやがります」

機械的な声がスピーカーから聞こえてくる。

なんだよこれ。朝からろくなことがないな。

夜遅くまでゲームして寝坊した俺は自転車を全力でこぎながら内心毒づく。

はじめはいたずらか？とおもったがサドルの下から聞こえてくるピッピッピという音で事実と実感した。

こんな普通の自転車に取り付ける爆弾だ、そこまで大きくはないだろう。

だいたい子の次に来る言葉は予想できた。

「自転車を降りやがったり、減速すると爆発しやがります」

再びスピーカーから機械的な声が聞こえる。

予想通りだ。この手のパターンのジャックならおなじみの台詞だ。

「携帯を使用した場合も 爆発しやがります」

再び聞こえる機械的な声。

んーこれじゃあ助けを求めるのは無理そうだな。

こんなときでも俺は冷静だった。俺も武偵の端くれこんなことで平常心をなくしてたら武偵の恥つてもんだ。

このシュチュエーション、まさか例のチャリジャックか？

ニユースでは模倣犯はつかまったと聞いてたんだがな。

まあどでもいいーっちゃどーでもいいか。

とりあえずこの死亡フラグを回避しねえとな。

登校途中に爆死なんていやだからな。

助かる方法を考えた拳句、頭に浮かんだのは・・・自爆。

これしかないだろ。

後ろでは二輪が銃を向けて待機している、それにこちらも自転車をこいでいるので解除はできなさそうだしな。

俺はどうするかって？

もちろん自爆する前に逃げるさ。

下手すりゃ死ぬかもしれないが何とかなるだろ。

つかまず俺が『死ぬなんてありえない』がな。

お、ちようどいいところに川があるじゃねえか。俺は覚悟を決めて作戦を開始する。

制服のポケットから携帯用のワイヤーを取り出し、近くにあった木に向かって発射。

もちろん自転車は全力でこいでいる。

さらに後ろから撃たれるよりも早く振り向きざまに愛銃であるデザ

ートイーグルを取り出し発砲。

二輪につんであった短機関銃サブマシンガンおそくはUZIであったそれは粉々に破壊された。

自転車はそのまま川に突っ込み川に落ちたかと思つた瞬間爆発した。まだあの自転車買ったばかりだったんだがな・・・

俺は内心落ち込みながら校舎へ向けて歩き出した。

幸い校舎は近くにある。　すぐつくだろう。

ここ、武偵高こと武偵高校はレインボーブリッジの南に浮かぶ南北2キロ・東西500メートルからなる長方形の形をした人口浮島^{メガフロート}の上にある。

学園島とあだ名されたこの人口浮島は『武偵』を育成する総合教育機関だ。

武偵とは凶悪化する犯罪に対して新設された国際資格で、武偵免許を持つものは武装、逮捕権などを有するなど警察と似た活動ができる。

警察と違うところは金で動くことだ。

金さえもらえば武偵法の許す範囲内ならどんな仕事でもこなす便利屋だ。

でなぜこうなった？

俺は今茂みに隠れている。

目の前には友人であるキンジと、見知らぬ女の子がいる。

どうやらもめているようだがこの距離ではあまりよく聞き取れない。少女が顔を赤くしながら口論しているとキンジの背後の茂みが動いた。

キンジはすぐそのことに気づいたようだが、少女は頭にちが上っているのか気づいていない。

「待て！アリア」

キンジは少女 アリアのところへ向かって駆け出す。

かばう気か？

茂みから出てきたのはさっきの二輪が3機。

このままじゃやばいと思った俺は、ワイヤーを取り出し前方の壁に向かって発射。

キンジと二輪の間に入るように滑り込む。

今度はデザートイーグルではなく、漆黒の炎の装飾が施されたガバメントを抜き、すでに短機関銃サブマシンガンから放たれた銃弾をはじく。

その間に左のホルスターから取り出したデザートイーグルで相手の銃を破壊。

俺のガバメントは少し改造がしてあって通常より装弾数が多いので少々撃ったところで弾切れにはならない。

そのまま飛んでくる銃弾をはじつつデザートイーグルで残りの2機を破壊。

「ようキンジ、朝から災難だったな」

銃をしまいつつ後ろの体育倉庫に隠れていたキンジに呼びかける。

「ああ、だが今はそれどころじゃない・・・逃げるぞ誠！」

キンジが校舎の方に向かって全速力で走りだす。
俺もキンジについていったが、途中やつが撒いた銃弾でこけそうになったぞ。

「待て強猿男！・・・みやおきや！」

後ろを振り向いて見ると見事にこけたアリアがいた。

「逃げるなこの卑怯もの！でっかい風穴あけてやるんだからあ！」

それにしても、キンジ足速いな付いていくのが大変だぜ。

それにさっきの逃げるときの行動、もしかしてこいつヒステリアモードか！？

などと考えてるうちに武偵高に到着、時計をしてみるが完全に遅刻だな・・・

ブログ 運命の出会い（後書き）

もうすぐ入試があるので、更新は不定期ですができる限り書いて行きたいと思っています。 応援お願いします。

第2話 突然現れたピンクの悪魔

俺は今新しい2年の教室に向かっている。

ここまで完全に遅刻すると慌てる気も起きないな。

ちなみに俺とキンジのクラスは2・Aだそうだ。

「それにしてもキンジ、何であんな状況に？」

「俺の自転車に爆弾が仕掛けてあつてな、あの子にそれを助けてもらったんだ・・・」

「まじか、実は俺の自転車にも爆弾が仕掛けられてたんだ。それにしてもキンジなぜお前ヒステリアモードだったんだ？」

「うつ・・・それは・・・」

「まあ話したくないならそれでもいいが」

キンジの顔は少し暗い。

やはり女の子の前でヒステリアモードになったのはショックだったんだろう。

ヒステリアモードというのは正式には『ヒステリア・サヴァン・シンドローム』一定以上の恋愛時脳内物質が分泌されると常人の30倍以上の量の神経伝達物質を媒介して大脳・小脳・脊髄といった中枢神経系の活動を劇的に亢進させるといったものらしい。

その結果、論理的思考力、判断力さらには反射神経までもが飛躍的に向上するといったスーパーモードになれる。

これだけすごい能力だが、発動条件が性的に興奮することなのでキンジはこのモードになることを嫌っている。

何でも中学のときこの体質のせいでひどい目にあっただけなのだが、キンジはこのことをあまり語りたがらない。大体想像はつくんだけどな。

「よう、キンジに誠！お前らもAか！」

声のするほうを見てみると。車輛科の武藤 剛氣がこちらに歩いてきた。

「お前相変わらずげんきだな」

俺が言うと武藤はキンジをみて

「どうした？キンジ、星伽さんと同じクラスになれなかったのが悲しいのか？」

「武藤・・・今俺に女の話はするな・・・」

マジで怒ってるらしく、武藤が一步引いた。

ちなみに星伽とは星伽 白雪のことでキンジの幼馴染でキンジの家に行ってる時に知り合った。

一言でいうと、大和撫子ってところか。

かなりヤンデレが入ってはいるがな・・・。

「それはそうと誠お前今年はどこに入るんだよ」

「今年は探偵科の予定だ、少し頭も鍛えねえとだねだからな」

「そうか・・・でもお前ぐらいだぜ、ころころと担当科目かえてるの」

「それが俺のやり方なんだよ」

そう俺は強襲科なら強襲科をずっと続けるのではなく、いろいろな科目に参加している。

メインは強襲科なのだが、狙撃科や装備科などといった戦闘に関係する科目は全般に参加しているということだ。

「先生あたしあいつの隣がいい」

今は俺たちがクラス分けされた最初のホームルーム。

なんとさっきのピンクのツインテールの少女 神崎・H・アリアが同じ2年A組だったのだ。

「キンジ残念、逃げ切るのは無理そうだぜ」

俺はキンジに小声でつぶやく。 周りはアリアのキンジの隣がいい発言で大盛り上がりだ。

かわいそうにキンジおびえてるぞ。
一体あの子になにしたんだ？

「な、なんでなんだよ」

「よくわからんが残念だったなキンジ、あきらめて死ね」

「強襲科のやつらみたいなこといな！」

「いや、俺基本強襲科なんだが・・・」

「そついやそつだつたな……」

キンジが頭を抱え込む。

んー、少し言い過ぎたかな？

ちなみに強襲科では『死ね』が挨拶代わりに使われている。

普通の高校では考えられないようなことを言いまくるとんでもない学科である。

1年の時はキンジも強襲科だったんだがな。

「よ、よかったなキンジ！なんだか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！先生！俺くじ引きでキンジの隣だったけど転校生さんとかわかります！」

武藤がすばやく荷物をまとめ席を替わる。

クラスの黄色い歓声は収まるところをしないな。

「キンジ、これ さっきのベルト」

べ、ベルトって……キンジ本当に一体その子になにしたんだ？？？

「理子わかった！わかつちゃった！　これフラグばっきばきにたつてるよ！」

キンジの隣に座っていた峰理子が勢いよく席を立つ。

「キー君ベルとしてない！　そしてそのベルトをツインテールさんが持ってきた！　これ謎でしょ！　謎でしょ！　でも理子には推理できた！　できちゃった！」

大体アリアと変わらない身長をもつ小柄のこの子は探偵科でNO、1のおばかさんだ。

制服もひらひらのフリルだらけの服に改造してある。

キー君とは理子がつけたあだ名である。

ちなみに俺はマー君というあだ名で、俺自身あまりそういう呼び方をさるのは好きではない。

「キー君は彼女の前でベルトを取るような何らかの行為をした！そして彼女の部屋にベルトを忘れてきた！つまり二人は・・・熱い熱い恋愛の真っ最中なんだよ！」

まあ、朝のあの感じからしてそういう関係ではないと思うんだがな。

しかし周りのやつらはそうは思わない。

「キ、キンジがこんなかわいい子といつの間に!？」 「影の薄いやつだと思ってたのに」

「フケツ」

キンジが頭を抱えて机に突っ伏したとき、

ずきゅんずきゅん！

鳴り響いた二発の銃声が教室に響きみんなぴたりと止まる。

真っ赤になったアリアが銃を撃ったのだ。

「れ、恋愛なんてくだらない！」

あーあ壁に穴があいてるぞ。

ちなみにここ武偵高では銃は必要以上に発砲しないというルールー

になつてある。

つまり、してもいい。

．．
まあ、自己紹介中に銃をぶつ放したのはアリアが初めてだと思うが．

「全員おぼえておきなさい！ そんなバカなこと言うやつには．．．」

これから何万回と聞かされることとなる言葉をアリアは言い放つ。

「風穴開けるわよ！！」

第3話 奴隷宣言

どうしてこうなった？

あの最悪の自己紹介が終わって、現在俺はアサルトにいる。

そこでアリアは突然俺に一对一の勝負を申し込込んできたのだ。アサルトの教師、蘭豹はやれやれの一言。

「誠、あんたの実力見せてみなさい」

ガバメントを構えるアリア。

ん？俺こいつに名前教えたっけ？

まあいい、久しぶりに本気で戦ってみるか。

「始める！糞ガキども！」

蘭豹の合図とともにアリアが二丁の銃で3発ずつ発砲した。

俺は同じくガバメントを取り出しそれを丁寧にはじく。

前にも言ったが俺のガバメントは改造してある。通常は8発までしか入らないが俺のはその倍の16発まで入る。デザートイーグルもあるので装弾数では俺が有利だ。

俺は背中に隠してあった短めの日本刀を取りだし構える。

銃と刀を同時に使う、これが俺の戦闘スタイルだ。

その間にもアリアは俺めがけて2発発砲してくる。

直撃は免れそうにない銃弾を俺は日本刀で切り裂く。

この日本刀はかなりの業物でな、銃弾ぐらいなら簡単に切れる。

俺とアリアの銃技を互角とすると、このままでは勝つのは難しい。仕方ない、と俺は目をつぶり精神統一

「あたしをなめるな！」

いつの間にかマガジンを入れ替えてフルオートで発射された16発もの銃弾は俺には届かない。

無駄のない動きで回避した俺はガバメントをしまい、デザートイーグルを取り出す。

一撃で決める！ デザートイーグルで一発発砲、アリアは銃口から飛び出した銃弾の軌道読み、すぐそれが当たらないように回避を取る。しかし突如軌道を変えた銃弾にアリアは吹っ飛ばされた。

「そこまでだ！糞ガキども！」

蘭豹の声。

俺はアリアの首元に日本刀を突きつけていた。俺の勝ちだ。だが、アリアは苦悶の表情を浮かべつつ

「ぐっ・・・あんたいつたい・・・」

「なかなか楽しめたぞ、じゃあな」

「もう一回勝負しなさい！」

「また今度な」

俺はアリアに背を向け、アサルトを出て行った。

突然だが俺、杉崎誠は学園都市の人間であつた。
レベル5に最も近いとされたレベル4の風使いだ。
俺はアンチスキルに所属していて、そのとき起こつたとある事件の
犯人を探しだしぶち殺・・・捕まえるために武偵になつた。

さっきの曲がる銃弾もこの能力を使用したものだ。

俺は能力を使用するとき目を閉じ集中力を高める。それにより俺は
レベル5並の力を使うことができるのだ。

これがなければレベル5らしいのだが、武偵高に転校してきてし
ばらくたつた今もまだこれは克服されていない。この能力使用モード
の時の俺は周りの物の動きを風で察知することができる。
そのおかげでアリアのフルオート射撃回避できたわけだ。

んーやっぱり疲れるなあ・・・能力使用モード、早く休みたい。

俺は今キンジの家の前にいる。俺は今年強襲科から探偵科に移動す
ることにした。

マスターズから部屋はキンジのここを使えといわれたので、引越
しの準備を整えてきたのだ。

ピピンポーン 呼び鈴を押す。

この鳴らし方は俺がキンジの家に来たとき毎回している鳴らし方で
このやり方だと、大体キンジは出てきてくれる。

「はい？」

「よう、キンジこれからよろしくな」

「ん？どうした誠？」

「マスターズから聞いてないのか？俺今日からここに住むことになったんだ、ほらこれ手紙」

その手紙には

『杉崎 誠 お前これから遠山のところにすめや！』

「蘭豹か・・・まったく勝手な・・・」

「なにわともあれ、これからよろしくなキンジ」

「ああ、よろしく。部屋はあいてるところを好きにつかってくれ」

「サンキュー」

ここはもとも4人部屋だが、キンジが探偵科に移動した時期もあって今は一人で使っているらしい。

俺が部屋に荷物を置いていると・・・

ピンポン・・・また呼び鈴が鳴る。

キンジは反応しない居留守を使う気だな。

ピンポンピンポン・・・

ピポピポピポピポピピンポン

「だれだよ」

とたどた、痺れをきらしたかキンジがドアの前に行き、ドアを開け

る。

俺も誰か気になったので部屋をでて廊下に出る。

「遅い！ あたしがチャイムを鳴らしたら5秒以内にでること！」

両手を腰に当てて、赤紫色のつり目をぎぎんとつりあげていたのは

「か、神崎！？」

制服姿の神崎・H・アリアだった。

「アリアでいいわよ」

キンジを押しつけて部屋に入ってくるもんだから、俺とアリアの目が合った。

「何だ、誠もいたのね。ちょうどいいわ」

「ふえ？」

間抜けにも変な声だしちゃった。

キンジの制止も聞かずアリアはそのトランク中に入れといてという言葉を残し、リビングに入っていつてしまった。

俺が外を見ると、ブランド物の車輪つきトランクがあった。

仕方ねえ、運んでやるか。

お、重・・・何は言ってるんだよこれ。

キンジも廊下に女物のトランクがあつてはまずいのか運ぶのを手伝ってくれる。

リビングに運ぶとアリアが部屋の様子を見回していた。

「あんたたち、二人暮らしなの？」

「ああ、今日からな」

「まあいいわ」

何がいいんだ？

アリアは窓のそばまで行き、体を夕日に染め、アリアは俺たちに振り返りこついた。

「キンジ、誠。あんた達あたしの奴隷になりなさい！」

っ 奴隷宣言・・・まじかよ・・・

第4話 新しい発見

ど、奴隷！？ 意味がわからん。

アイコンタクトでキンジに助けを求めてみるが、固まってるな。

「ほら！ さつさと飲み物ぐらい出しなさいよ！ 無礼なやつらね！」

たった今俺達に奴隷になれと宣言してきたアリアはぽっすつとソファーに座ってしまう。

「コーヒー！ エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！ 砂糖はカンナ！ 一分以内！」

無礼者はどっちだまったく。

それに何だそのコーヒーは、エスプレッソまでしかわからん。

俺はアイコンタクトで『とりあえずコーヒー出してやれよ』とキンジにアイコンタクトを取る。

『了解』とキンジはアリアにインスタントコーヒーを出した。

アリアは不思議そうにコーヒーのにおいをかいだりしながら

「これほんとにコーヒー？」

「それしかないんだ、ありがたく飲めよ」

「変な味、ギリシャコーヒーにちよつと似てる・・・でもちよつと違う」

何だギリシャコーヒーって。

この子こんな小学生みたいに見えてコーヒー好きなのか？ 人は見かけによらないもんだなあ。

「今朝助けてくれたことは感謝してる。それにその・・・お前を怒らせるようなことを言ってしまったのは謝る。でもなんでからってここに押しかけてくる？」

アリアは目だけをキンジにむけ

「わからないの？」

「わかるかよ」

「誠もわからないの？」

「わかるか！ てか何で俺の名前しってるんだ？ 名乗った覚えはないんだが・・・」

「あんた朝体育倉庫にいたでしょ。気になったから調べてみたのよ」
調べた！？ いやまであれには気づいてはいないだろう。

あれはマスターズにも隠してもらってるしな。とくにあいつらがそんな簡単に情報をもらすわけがない。

「あんた達ならすぐわかると思ってたのに。 んー、そのうち思い当たるでしょ。 まあいいわ」

よくねえ！

キンジと俺は同時に叫んだ

「そんなことより、おなかすいた」

いきなり話題を変えやがった

お、そのソファーの手すりにもたれかかる仕草かわいな。
キンジ大丈夫か？

見るとキンジは少し顔を赤くして目をそらしている。

「なんか食べ物ないの？」

「ねーよ」

「ああ、パンならあるぞ賞味期限昨日切れたばかりだからまだ・・・」

「

「風穴あけられたいの？」

「すみません」

俺は素直に謝る。

女の子に賞味期限切れを進めるのは確かにどうかと思う。

あれ、昨日の晩飯ように買ってたが結局ゲームに夢中でくわなかったやつだし。

「じゃあ、コンビニでもいくかキンジ」

よく遊びに来ていたのでわかる。

キンジの家には基本食べ物がないのだ。

「コンビニに？ ああ、あの小さなスーパーのことね。じゃあいき

ましょう」

「じゃあってなんだよ」

「馬鹿ね、食べ物買いに行くのよ、もう夕食の時間でしょ」

そろそろ太陽が沈んでまうというこの時刻、俺は今朝の体育倉庫に来ていた。

キンジをコンビニに誘ったのはよかったが、用事を思い出しなんか適当に買ってきてくれと言ってからキンジたちと別れここにきたのである。

「は、結局、巻き込まれたな俺。いつもはただの不幸だが今日は少しラッキーだったかもな」

さて、と俺はある人物に電話をかける。

「もしもし」

「はいはい、どちらさまかにゃー？」

「俺だよ誠だよ、報告することができたんだ」

「誠か？ 半年ぶりだにゃー、それで報告とは？」

「あれを持ってるやつを見つけた。このレーダーにもばっちり反応してたしな」

と俺は右手に持った外見は携帯のレーダー見る。

これは学園都市が秘密裏につくり出したある金属に反応するレーダーだ。

「何！？ わかった上に報告しとく、誠は現状維持でたのむぜい」

「了解、じゃあな」

電話を切りポケットに直すと俺は小走りで家に帰ることにした。

第5話 大ピンチ!?

「ただい・・・」

「でてけ!」

俺がただいまーといい終わる前にアリアの怒鳴り声がする。 どうしたんだ?

「な、なんで俺が出て行かなくちゃならないんだよ!」ここはお前の部屋か?」

「分らず屋にはお仕置きよ! 外で頭冷やしてきなさい! しばらく戻ってくるな!」

フーとアリアは猫のようにキンジに威嚇している。 災難だなキンジ。

「何してんのよ、誠」

「ふえ?」

「あんたも出て行きなさい! 風穴開けるわよ!」

俺もかよ! 今帰ってきたところなんだぞ。 少し休ませてくれよ。

こうして俺とキンジは夜の外へ追い出されるのだった。

「ありえんだろ、あいつ」

「まあそうだな」

俺達はアリアに追い出されたあと近くのコンビニで暇をつぶしていた。

ここにおいてある雑誌ほとんど昨日読んじまってひまだな！。こつなるなら昨日読まなきゃよかったぜ。

「誠はどうするんだ？ あいつと組むのか？」

「組む？ なんのことだ？」

「ああそうか、誠はあの時いなかったか。 どうやらアリアは俺達とチームを組みたいらしい。 それと俺達がチームを組むと言うまですで家に居座るそうだ・・・」

「はは、災難だなキンジ。 俺は別にチーム組んでも良いと思うぞ。 あの子結構面白そうじゃねえか」

「なら、お前らだけで組んでくれ。 俺を巻き込むな」

「そりゃあ無理だろ。あの子俺とキンジをチームに加えたいんだろ?」

「くそっ何でこうなったんだよ・・・今日は最悪の日だよ・・・」

「俺も今日は厄日だ・・・」

「誠は強襲科だったんだから何か知ってるんじゃないのか?」

「いや、知つてのとおり俺は普段能力は使ってないし、目立つこともしてない。ごく普通のAランクとして過ごしている俺が目を向けてもらえることなんてなかったんだがなあ」

「前から思っていたがなんで能力使わないんだ? 使えばSランクは確実だろ」

「切り札は隠すもんだからな。それに相手がただのAランクと油断してくれるかもしれないだろ」

それに俺の戦闘スタイルは刀と銃を両手に持ち、相手の攻撃を粉碎しつつこちらの攻撃を確実に当てて倒すをいったものだ。いくら攻撃を防いでも相手に当てることができなければ意味がない。

だから相手が能力を知らないなら戦いやすい。

なので俺はこの能力のことはキンジにしか話してはいない。

キンジとは昔よく組んでいたからこの能力のこと教えていたほうが連携もとりやすかったからな。

「そろそろ戻るか?」

コンビニにきて30分ほど、コンビニで立ち読みも限界がある。
俺は持っていた雑誌を棚にもどす。 キンジは律儀に一冊雑誌を買
ってるな。

「先行ってるぞ」

「あ！ ちょっとまってよ！」

俺はポケットから棒状の携帯ワイヤーを取り出しキンジのベランダ
の柵に絡めると一気に巻き戻す。

んーやっぱりなかなか使えるなこのワイヤー。

移動にはもってこいだ。 装備科の平賀さんには感謝しないとな。

ベランダから中に入るが人の気配がない。

帰ったのか？

そういやまだ風呂入ってなかったなキンジが帰ってくる前に風呂で
も沸かすか。

風呂場に向かうと・・・

ちやばん

風呂場から音がした。

扉をソー・・・と開けてみると曇りガラスの向こうで電気がついて
いる。

まじかよ！

焦って辺りを見回してみると洗濯籠に女ものの制服と拳銃、日本刀
そしてトランプ柄の・・・

こ、殺される！ ここにいとやばい早く逃げないと・・・

俺が忍び足で風呂場から離れベランダから逃走を図ろうとしたとき、

玄関の扉が開いた。

「おい！ 誠おま・・・」

俺はダッシュでしかし足音は立てないようにキンジの口をふさぐ。
俺はアイコンタクトで『アリア 風呂 危険』とキンジに伝える。
キンジは顔を真っ青にして閉めたドアに手をのばしたとたん。

ピン、ポーン・・・

こ、この慎ましやかなチャイムは

（し、白雪だ！）

第6話 守るべき物

俺はよろけて壁にドンと手をぶつけてしまう。

「き、キンちゃんどうしたの？ 大丈夫？」

しまったー！ だめだもう居留守はつかえねえ。
諦めたようにキンジがドアを開けるとそこには巫女装束の白雪が立っていた。

うーん、やはり何度見ても美人だな。

「あ、誠君も一緒だったんだ」

「ちょ、ちょうど今日からここに住むことになったんだ」

「そ、そんなことより何だよお前のその格好は」

こら、キンジ！ バスルームを見ながら言っな！ 気づかれたらやばい。

「あつ・・・これ、私授業で遅くなっちゃって・・・キンちゃんに御夕飯作って届けたかったから、着替えないで来ちゃったんだけど・・・い、嫌なら着替えてくるよっ！」

「いや、別にいいから」

ほんとにキンジ一筋な子だな。 うらやましいぞキンジ。
白雪は超能力捜査研究科 通称SSRに所属している。
超能力といってもあそこ学園都市とは少し違う。

学園都市のように人工的に脳の回路を組み替えて能力を記録術する
のではなく、自然の霊場で修行し習得するらしい。

らしいというのは俺がそこには入ったことがないからだ。

白雪はその優等生らしいのだが、俺はその能力を知らない。

「ねえ、キンちゃん、今朝の自転車爆破事件の周知メールってもしかしてキンちゃんのこと？」

「ああ、俺だよ」

おお、白雪が飛び上がったぞ10センチほど。

「だ、大丈夫？ 怪我とかなかった？ 手当てさせて」

「俺は大丈夫だから、触んな」

「は、はいでもよかった無事で。それにしても許せないキンちゃんを狙うなんて！ 私絶対犯人を見つけてコンクリ・・・じゃない、逮捕するよ！」

こ、こえええ。 この子だけはぜったに敵に回しちゃだめだ。

東京湾に沈められる。 確実に。

「し、白雪！ 大丈夫だってこんなことここでは日常茶飯事だろ？ この話はこれで終了！」

「は、はい、えつと・・・はい」

まったく、キンジの前だとすぐ言うこと聞くい子だよなあ。
アリアにもこういうところは見習ってほしいもんだ。

素直なアリアか・・・だめだ想像できん。

「でも、キンちゃんたち少し変だよ」

「へ、変？ どの辺が？」

キンジい！ 焦るな！ 冷静になれ！

「なんかいつもより冷たい気が・・・」

「俺達いまゲームで勝負しててさ。 今良いところなんだよ、それで早くゲームに戻りたくて」

「ゲーム？」

白雪は首をかしげていたが納得してくれたようだ。

「じゃあ、これ」

白雪がもしもと手に持っていた包みを渡してくる。

「筍ご飯作ったの、今旬だし、それに私明日から今度は恐山に合宿でキンちゃんのご飯作ってあげられないから・・・」

キンジの顔が一瞬、ほんの一瞬だけ明るくなったような気がした。
キンジ贅沢だぞこんなにいい子なのに。

「ああ、ありがと、よし用事は済んだ、さあ帰ろう、な？ な？」

「一日に二食も作っちゃうなんて、 な、なんか私お嫁さんみたい

だね・・・って何言ってるんだろ私。 あは、あはは変だね。 うん。
キンちゃんどう思う?」

「わ、分かったからお引き取りください、白雪さん」

き、キンジ敬語やめろ! ばれるって!

「分かったって・・・それってつまり私キンちゃんのお嫁・・・」

ぽちゃん

や、やべええ アリアが出てくる!?

「中に誰がいるの?」

「中には誰もいませんよー」

だから敬語やめろ! ばれる、マジで!

「キンちゃん、誠くん? 私に何か隠してることない?」

「「ないない!」」

二人ではもる。 やばい、ばれたか・・・?

「そう、よかった」

白雪が背を向けて帰っていく。 ふう、白雪でよかったぜ。
よし!

扉が閉まると同時に俺とキンジはガッツポーズをとる。

危なかった、後はアリアだ。

おそらく俺達を追い出したのは風呂に入りたかったからだろう。
すなわち、今俺達がここにいることは死を意味する。

武器を没収しておこう。

後々考えればこのときさっさと逃げてればよかったのだが切羽詰つ
てる俺達にそんなことを考えてる余裕はなかった。

風呂場に駆け込み、制服が入った洗濯籠に手をつ込んだ瞬間、曇
りガラスの扉が開いた。

俺とキンジとアリアは目を合わせ、時が一瞬止まる。

ああ、いいにおいだなあ、場違いなことを考える俺とおそらくキン
ジ。

ツインテールをほどいてロングヘアになってた全身つるぺたのア
リアは

「へ、変態」

ぱつと右手で胸を左手でそ、その・・・おへその下を隠した。

そして、俺達の手が洗濯籠に突っ込まれてるのを見て鳥肌を立てて
いる。

やばい！ 早く弁解しないと！

「ち、ちが・・・」

俺とキンジは弁解しようと同時に手を上げるがそれがいけなかった。
キンジの手にした日本刀の鞘にはパンツ、俺の手にしたホルスター
にはブラがそれぞれ引っかかっていた。

小さなトランプ柄のマークがプリントされた子供っぽい・・・

「し、死ねえ！」

キンジが壁に蹴り飛ばされたのを見て、俺は転げ落ちるように飛び出した。

「逃がすか！ このド変態！」

素っ裸のまま飛び出してきたアリアは、俺が窓から飛び降りるよりも早く後ろから俺を蹴り飛ばし、俺そのまま意識を失った。

「……キンジほらさつさと起きる！」

目が覚めた俺が聞いたアリアの第一声はそれだった。部屋からは朝ごはんを催促するアリアの声と抗議するキンジの声が聞こえてくる。

俺はDEとガバメントをホルスターにしまい、背中に日本刀、別名『Absolute Cut』を背負う。

これは学園都市が極秘に発明した、どんな物でも切り裂く軽量かつ高い硬度を持つ日本刀だ。

この日本刀の刃にはある金属が使用しており、切ることのできる対象は人や銃弾だけではない。

超能力だろつが自然現象だろつが切ることができる。

もちろん切れるものはその持ち主の力量によるのだが。

装備を整え朝食であるカロリーメイトをかじっていると

「うまいことって逃げるつもりね！」

廊下にててきたキンジにアリアは噛み付いてしまう。

時計を見るともう7時55分だ。

「キンジやばい、58分のバスにおくれる！」

「なに！？ 離せアリア！ あれに乗れないと確実に遅刻なんだ！」

「やだ逃がすもんか！ キンジ達は私の奴隷だ！」

俺も奴隷ですか・・・って今はそんなことはどうでもいい。

「キンジ走るぞ！」

俺達が出発間際に乗ったバスは難なく学校に到着。

5時間目は専門強科の授業になる。もちろんクエストで校外に行くやつも少なくはないが。

俺はキンジに『アリア 情報 集める キンジも 頼む』とだけアイコンタクトで伝えその場を後にした。

俺は今情報科にいる。

アリアの情報にしろ、自分で調べるには限界がある。

そこで俺は情報収集を依頼しに来たのだ。

今回仕事を頼むのは俺と同じく学園都市からきた（俺が学園都市出身だとは知らない）

抓田剣斗だ。

いまだき珍しいいきのこ頭で目が狐のように鋭く語尾に『だぬ』がつく少し変わったやつだ。

普段はネットゲームなどばかりして遊んでいるのでランクはAしかし彼は本来この学校でトップの実力を持っている。

依頼両はネトゲのレアアイテム、これを出すと大抵しっかり仕事をしてくれる。

「よう、剣斗ひさしぶり」

「おう、誠今日はどうしただぬ？」

「依頼だ依頼。 神埼・H・アリア こいつの情報を集められるだけ頼む」

「報酬によるだぬ」

とさりげなく、ほしいものリストと書いてある紙を見せるように引き出しから取り出す。

「んじゃ『聖剣虎』でどうだ？」

「おっけーだぬ。今日中に調べとくから午後にとりにきてだぬ」

その日の午後資料をもらった俺は、ある人物に電話をかけていた。

「……を手に入れるのは難しそうだ。 あれは俺達でどうこうで
きるものじゃない」

「だが、……は絶対に死守しなくちゃならないぜい。 魔術サイ
ドにそれが渡るとやばいからにやー」

「了解、また何かあったら連絡する」

第7話 キンジ、シスコン疑惑

「よう、キンジ」

俺は女子寮の温室から出てきたキンジに声をかける。

「ま、誠!？」

キンジは手に持っていた袋をさつとかくす。

「何だよそれ？」

「な、なんでもない。ただの袋だ」

怪しいぞキンジ、俺はキンジが隠したそれをすばやく奪い取る。

さあて中身はなにならう。

よ、よせというキンジの制止を聞かずあけてみるとそこには・・・

「ま、妹ゴス2、3・・・。キンジまさかお前にこんな趣味があったとは・・・」

普段ヒステリアモード二なることを恐れ女子と距離を置いているキンジからは考えられない。

そうかキンジは妹好きなのか。

「ち、ち、違う! 誤解だ!」

「まあそう焦るな、みんなには黙っててやるから。キンジがシスコンってことはさ」

「それが誤解だ！ それは理子に頼んでいたアリアの情報収集の報酬の残りだ！ 2や3は嫌いだって受け取ってくれなかったんだよ！」

「なあんだ」

確かに理子は2や3などの続編を嫌う傾向にある。
なぜだかは知らんが。

キンジの手をふと見ると腕時計がない。

「キンジ腕時計どうした？」

「さっき理子に情報をもらったときに壊れて、理子が『クライアントの持ち物をこわしたら理子の信用にかかわる』とかで持って帰っていちまったんだよ」

んーなんだろ。

なんかよくないことが起きる気がする。
気のせいだと良いんだがな。

あの後キンジと別れた俺は寮には帰らずにとある人物と待ち合わせをしていたファミレスにきていた。

「何のようだ？ お前が俺をよびだすなんて」

「なァーにたいしたことはない。ちょいと新しい発明品をもってきたただにやァー」

と金髪でグラササンをかけ、緑のアロハシャツをきている男が机の上に時計と・・・なんだこれ？

「この黒いでこぼこの箱はなんだよ」

「こっちの時計は前に渡したレーダーの新作だ新しい機能もつけたある。それとこっちは特殊弾だぜい」

「特殊弾？」

「そっちにもある武偵弾と同じ能力付きの銃弾だ。能力とかかわこれの中に書いてある」

ん？これどうやってあけるんだ？ か、硬てえ。

これ本当に人の力で開くのか？

俺ががんばっている金髪でグラササンをかけた男はそれ時計つけない

とひらかないんだにゃーとけらけら笑っている。

先に言えよ！

やっと開いた箱の中を見ると・・・さまざまな色の弾丸がきれいに並べられて入っていた。

弾の大きさからしてDEようだな。

「まだ試作品だが、戦闘では結構やくだつとおもっぜい」

「ああ、サンキュー」

「それとこれからのことだが、誠お前はあいつの護衛に当たってくれ」

「やっぱりあれの持ち主ってことか」

「おそらくはな」

「了解だ。それと第一位にもよろしくと伝えといてくれ」

と言に残し俺はファミレスを出て、学生寮に向かって歩き出した。

第8話 堕ちたキンジ

「アサルトに戻ってあたしから逃げたときの實力をもう一度見せてみなさい！」

「あれは・・・あの時は偶然うまくいっただけだ。所詮俺はEランク武偵なんだよ」

「嘘よ、あんた入学試験の成績Sランクだった」

家に帰るなり何なんだこれは？

リビングからはキンジとアリアの怒鳴り声が聞こえてくる。

入学試験か・・・俺もキンジと戦ったんだが能力使う前にまけたんだよな！。

キンジのヒステリアモードのこともそこで知ったんだっけ。

その時、俺とキンジは受験生をはじめ隠れていた教官も全て倒したため俺達は入学当時Sランクだった。

それ以来は本気を出していなかったのでAランクに下がったんだけどな。

アサルトのSランクは特殊部隊一個中隊に匹敵するものだから当然といえば当然だが・・・

「つまり、あれは偶然じゃなかったってことよ！ あたしの直感に狂いはないわ！」

「と、とにかくだ・・・あ、誠！」

キンジが俺に気づいたみたいだ。

「どこ行つてたのよ誠！」

「ちょっと昔の友達に会つてな、ファミレス行つてたんだよ」

「前の高校のやつか？」

話題を変えるチャンスとみたか、キンジが話に乗ってくるな。

「まあ、がくえ・・・」

「キンジ！　話はまだおわつてないわよ！」

駄目だ、話題は変えれそうにないぞキンジ。

「と、とにかく今は無理だ！」

「今は？　ってことは何か条件でもあるの？　行ってみなさいよ協力してあげるから」

うーむ、アリアはその協力つてのが分からないからいえるんだよな。キンジをヒステリアモードにするには性的に興奮させる必要があるからな。

たとえば、下着を見せるとか胸をさわらせるとかキスをするとか・・・この子が進んでできることとは思えんことばかりだ。

ほら、キンジも手伝わせるところを想像したのか顔が赤くなってやがる。

「教えなさいその方法！　奴隷にあげる賄い代わりに手伝つてあげるわ」

ずずい、とアリアがキンジにせまる。

やばいな、ヒステリアになったら・・・

いやまで、むしろあの時のキンジのほうがすんなり言うことを聞いてくれるかもしれんぞ。

あの状態のキンジは女の子の言うことはめったに断らないからな。

「キンジ、お前の負けだよ」

キンジは裏切り者という目で見てくるが妥協したらしい

「一回だけだぞ」

「一回だけ？」

やっぱり、無条件降伏はしねえか。

「戻ってやるよアサルトに、ただし組んでやるのは一回だけだ。

戻ってから最初に起きた事件をお前と一緒に解決してやる。それが条件だ」

「・・・」

「だから転科じゃなくて自由履修としてアサルトの授業をとる。それでもいいだろ？」

キンジお前の考えは大体わかる。

アリアと組もうと考えている俺とは違い、お前は組みたくはないからヒステリアモードでなく通常モードでアリアを失望させる気だな？通常モードだとマジでEランクだからお前。

「いいわ、この部屋から出て行ってあげる」

アリアもついに妥協したな

「あたしにも時間がないしその一件であんたの実力を見極めることにする。もちろん、誠も自由履修とりなさいよ。そこでもう一度見極めさせてもらうわ。前のままでもあんたは十分合格点だけだ」

仕方ねえか・・・これも任務のうちだしな。

「どんな小さな事件でも一件だぞ」

「OKよ その代わりどんな大きな事件でも一件よ」

「分かった」

「ただし手抜きしたら風穴あけるわよ。 もちろん誠も！」

「ああ、約束する全力でやってやるよ」

「了解、」

キンジと俺が言うところアリアは満足そうに部屋をでていった。

それにしてもキンジと組むの久しぶりだな。

どうか大きな事件が起こってくれますようにと俺は神さまに祈るのだった。

どうせするなら派手に行きたいだろ？

第9話 明日無き強襲科

アサルトは100人に97人しか卒業できないといわれている。
通称『明日無き学科』

まあ、必ずしもそうではない。

100人全員が卒業できた年もあるらしいし。

訓練中に命を落したり 依頼中に命を落したりなどその理由は
さまざま。

もちろん三人以上の時もある。

お、キンジがきたな。

俺は先に蘭豹に話を通してあったので、すでに自由履修の手続きな
どは済んでいる。

はは、さすがキンジ人気者だな。 囲まれてやがる。

ここまで声が聞こえてくるぞ

「おう！キンジ！ お前は絶対帰ってくると信じてたぞ！ さあ、
ここで一秒でも早く死んでくれ！」

「まだ死んでなかったのか夏海！ お前こそ俺よりコンマ一秒でも
早く死ね！」

「キンジいー！ やつと死にに帰ってきたか！ お前みたいな間抜
けはすぐ死ねるぞ！ 武偵ってのは間抜けから死んでいくものだか
らな」

「じゃあ何でお前が生き残ってるんだよ、村上」

『死ぬ』ってのはアサルトでは日常会話のおはよう、こんにちわと

同義なのだ。

もみくちやになりながらもみんな楽しそうだ。
いつもパーティを組んで活動するアサルトではみんな自然と人懐っこくなる。

アサルトは死ぬ確立はあるのだが楽しいんだよな。

「ハハハ、やっぱり面白いよなアサルトは」

「全然おもしろくない。だから戻りたくなかったんだ」

夕方、アサルトを出た後俺はキンジに笑いながら話しかけていた。
キンジは肩を落としてるな。

諦めな、お前はアサルトに戻る運命だったのさ。

「お、アリアだ」

「何？」

キンジが顔を上げると校門のところにいたアリアがこちらに来る。
キンジと俺はアリアを挟むように歩き始める。

「あんた人気者なんだね、ちょっとびっくりした」

「こんなやつらに好かれたくない」

「おい！ それって俺も入ってるのか？」

「当たり前だ」

くそ、はつきり言いやがった。俺もうアサルトじゃないんだぞ！

アリアはそんな俺達を見ながら

「あんたって人好き合い悪いし、ちょっとネクラ？って感じもするけどさ・・・このみんなはあんたや誠には一目をいてる感じがするんだよね」

それはやっぱりあの入試試験を見てるからだろうな。

俺はキンジにこそ能力を出す前に負けたが、その前はバリバリ能力使って戦ってたからな。

その俺をキンジは一瞬で倒したんだ。みんながキンジに一目をおいているのも当たり前と言っちゃ当たり前か。

アリアはちよつと視線を地面に下ろしながらキンジを見る。

「あのさキンジ」

「なんだよ」

「ありがとね」

「何をいまさら・・・」

声は小さかったものの心底うれしそうにするアリア。

むう、なぜかキンジにむかつく。

「勘違いするなよ。俺は仕方なくここに戻ってきてるだけだ。事件を一件解決したらすぐ探偵科に戻る」

「分かってる、でもさ」

「なんだよ」

「アサルトの中を歩いてるキンジなんかっこよかったよ」

キンジ、顔があかいぞ

「あたしなんかアサルトでは誰もよってこない・・・実力差がありすぎて誰も近寄ってこないのよ。」

まああたしは『アリア』だからそれでもいいんだけど」

確かに記憶をたどればアリアは転校してきてから一人でいたな。かわいいというつわさを聞いて俺も見たことはあったが、あいつは浮いていた。

「『アリア』って、オペラの『独奏曲』って意味もあるんだよ。」

一人で歌うパートなの。一人ぼっち　あたしはこの武偵高でもそう。　ロンドンでもローマでもそうだった」

「それで俺達を奴隷にして『デュエット』にでもなるつもりか？」

俺が聞いて見るとアリアはくすくすと笑った。

「あんたも面白いこといえるじゃない」

「そうか？」

「うん」

んー・・・アリアの笑いのつばはわからん。

「キンジはアサルトに戻ったほうが生き生きしてる。昨日までのあ

んたは自分に嘘ついてるみたいで苦しそうだった。今のほうが魅力的よ」

「そんなこと・・・ない」

ははは、キンジ今度お前の部屋に地雷仕掛けてやる！
死ね

軽いアサルトの挨拶をキンジにするとキンジは

「俺と誠はゲーセンに寄ってく。お前は一人で帰れ！てかそもそも今日から女子寮だろ。一緒に帰る意味がない」

あ、そういえばそうだったな。

今日こそバイ ハザードをクリアしてやるぜ。

このシューティングゲームは日本一の難易度を誇る。
理由は説明するまでもないだろう

「バス停までは一緒ですよーだ」

俺達をアサルトに戻せたのがうれしいのか、アリア嬉しそうだな。

「ねえ、『ゲーセン』ってなに？」

「ゲームセンターの略だ。そんなことも知らないのか？」

「帰国子女だからしょうがないじゃない。じゃあ、あたしも行く。
今日は特別に一緒に遊んであげるわ。ご褒美よ」

「いらねえよ、そんなのご褒美じゃなくて罰ゲームだろ」

キンジ、やっぱり女の子とは付き合い悪いな。

それだけヒステリアにはなりたくないってことか、などと考えていると目の前からキンジとアリアの姿が消えていた。

どこいった？ 辺りを見回してみると前方にキンジとアリアが……
って俺置いて行かれてる！

最初は早歩きだった二人だが次第に早くなっていきついには全速力に。

「お前らゲーセン行くだけで競争してんじゃねえ！」

まったく、こいつらの体力はどうなってんだ……

俺はぜいぜい言いながら遅れてゲーセンに入っていくのだった。

第10話 ゲーセンの戦い

俺がゲーセンに入ると最初に目に飛び込んできたのはガラスケースにへばりついたアリアだった。

なんか小学生みたいに見えるぞ。

俺は笑いをこらえながらキンジたちの方に向かっていくと

「おう、誠遅かったな」

「お前らが早すぎんだよ。それよりもどうしたんだアリア」

「かわいいー・・・」

アリアは口を逆三角形にしてよだれを垂らしかけていた。
これはだめだろ、公開できる顔じゃない。

「やってみるか？」

キンジが言つとアリアの顔がぱあっと輝く。

「できるの？　すぐできる？」

「できる、やり方を教えてやろうか？」

コクコク頷くアリア。

今日はやけに素直だなアリア。　ちよっと調子が狂うぞ。

俺はその場を離れ札を小銭に替える。

今月はいろいろもらっちゃったからな（装備や食品など）

自分で買わなくていい分金にも少し余裕がある、少しなので使いま

くることはできなが。
俺が戻ると

「今度こそ本気の本気！ 本気本気本気ほ ん き
い ！」

ハハ、どうやら全然取れないようだな。
見かねたキンジが何か言おうとしたとき

「ここはUFOキャッチャーの神と謳われた俺にまかせろ！」

ずいっと前にでてアリアを押し of ける。
プライドの高いアリアは当然の反発するが強引に押し of けた。
俺の実力みせてやるぜ！

10分後

「なぜだ、なぜなんだ・・・」

俺は地面にひれ伏していた。

「全然駄目じゃないの誠」

アリアの呆れたような声
くそ、こんなはずでは・・・

「もう一回だ！」

「やめとけって、破産するぞ誠。 今度はおれがやるよ」

うつ・・・そう俺は絶対にとるともう3万円ほど使っているのだ。
俺はアリア同様反抗はしたがキンジに押しのけられてしまう。

ハハハ、キンジも3万円ほど使って敗北を味わうがいい。

だがその願いはまったく叶わずキンジの操るクレーンは人形を吊り上げた。

落ちろ！落ちろ！落ちてくれー！念を送るが人形はどんどん持ち上がっていく。

「見てキンジ！二匹もつれてる」

ば、馬鹿な・・・

「キンジ放したらただじゃおかないわよ」

「もう、俺にはどうこうできねえよ」

「あ、入る！行け行け！」

こうなったらやけだ！いけえええええ！

クレーンが開き一匹、二匹と落ちて行き近くにあったもう一匹も引きずり込まれるように落ちていった。

「やった！」

「っしや！」

「うつし！」

無意識に本当に無意識にパチィと俺達はハイタッチしていた。

「「「あ」」」

目と目が合い俺達は目をそむける。
それにしてもキンジやるなあ。 これからのUFOキャッチャーの
神はキンジに決定だな。

「ま、まあ馬鹿キンジにしては上出来ね」

アリアは取り出し口から人形を三匹わしずかみにして取り出す。
タグにはレオポンと書いてあった。
聞かないキャラだな。

「かぁーわぁいいー！」

ぎゅうううとアリアはレオポンを思いつきり抱きしめる。

レオポン！ 逃げる！ 破裂するぞ！と内心思いつつ

この子もやっぱり年相応の女の子なんだなとおもった。

何かがこの子の本音を曲げている。

直感だがなぜかそんな風に思えた。

やはり『あれ』に関係があるんだろうか。

もしかしたらそれに『あいつ』がかかわってるかも知れない。

俺の家族を、親戚を、全てを奪った『あいつ』は俺が武偵になるこ
とを決め必ずぶち殺・・・逮捕すると誓ったそいつとつながってる
かもしれないしな・・・

「キンジ、誠！」

はっと顔を上げるとアリアは俺とキンジにさっきの人形を押し付け
てきた。

「ちょうど3つあるし、三人で分けましょう。 キンジの手柄だけ
と誠もがんばってたからご褒美よ」

釣り目気味の細めをにつこり細めたアリアに俺はドキッとしてしま
った、不覚にも。
ちくしょお、かわいいじゃねえか。

「ちょっと悔しいけどな」

俺とキンジはレオポンを受け取り、それが携帯のストラップである
ことに気づいた。

キンジが付けはじめ、それに続いて俺、アリアもつけ始めた。
俺ら三人そろって携帯のストラップなしだったのかよ。

「先につけたほうが勝ちよ」

何！？ アリアめ俺の負けを増やすきか！ くそっ！ 絶対勝つ！
やけくそ気味に紐を押し込もうとするが入らない。 この紐太いな。
誰だよこんなつけにくいのが得たやつは。

結果は、アリア、キンジ、俺の順番だった。

結局負けかよお・・・

まあ みんなほぼ同時だったんだがな。

その後も俺達はゲーセンでゲームを遊び尽くし帰るころには俺の財
布の中身は百円玉が3枚・・・

俺泣いてもいいですか？

第11話 事件発生

午前4時半、俺は欠伸をしながらベットから起き上がる。

ささつとジャージに着替え刀を背負い家をでる。

軽くランニングしてからアサルト訓練場の裏にある公園に行く。

よし、人はいないな。

俺は普段人前では超能力を使わないので腕が鈍らないためにここによく訓練している。

俺は風使いだがもうひとつ不思議な能力がある。

こいつはキンジにも教えてないのだが俺は火を出せるのだ。

学園都市では能力は一人一つというのが当たり前だ。

この能力は俺が物心ついたときから扱えていた。

まあレベル2並の火力しか出ないんだけどな。

これと風的能力を合わせると面白いことができる。

俺は目をつぶって精神統一

目標は地面に転がっている空き缶だ。

「むん！」

刹那、赤い光とともに空き缶が爆発

うんうん、調子いいな今日は。

その後刀の素振りをして俺は家に帰った。

シャワーを浴びてからソファでごろごろしているとキンジが起きてきた。

「おはよう誠、また特訓か？」

「ああ、キンジも朝練したらどうだ？ 結構たのしいぞ」

「俺はいい、遠慮しとく」

キンジと何気ない話をしているといつの間にか時刻は7時54分
そろそろ出るか・・・

どうしてこうなった・・・

7時58分のバスはよく混む。 しかも今は雨が降っている。
バスはすでに満員状態だ。

「やった！ 乗れた やったやった！ よう、キンジ、誠おはよう」

くそお、武藤のやつバンザイしてやがる。

「の、乗せてくれ武藤！ 時間が・・・」

俺とキンジは必死に頼むが

「そうしたいところだが無理だ！ 満員！ お前ら自転車でこいよ」

駄目だ！ 俺達の自転車はこの前粉々になっちまったんだよ！

「無理なもんは無理だ！ 男は思い切りが大事だぜ。 2時間目に
また会おう！」

2時間目に会おう、じゃねーだろ！

薄情者の武藤の言葉を最後にバスは扉を閉めてしまった。
もうためだ、遅刻確定だ・・・

大雨の中、俺とキンジは歩く。

いつそのことゲーセンでも行くかなど俺が思っているとキンジの携帯が鳴った。

「もしもし」

キンジがポケットから出たレオポンを引っ張り出し電話に出る。

『キンジ今どこ？ 誠もいる？』

アリアか？ 時刻はもう8時20分、一時間目が始まってる時間だ。
それなのに電話とは何かあったか？

「アサルトの近くだ。 誠もいるぞ」

「丁度いいわ。 すぐそこでC装備に武装して女子寮の屋上に来なさい！」

「何だよアサルトの授業は五時間目からだろ？」

「事件よ事件！ あたしが来ると言ったらすぐに来る！」

おいおい、まじかよ

C装備ってのはいわゆる強襲用の装備だ。

事件か・・・

アリアの言い方からしてそんな小さな事件じゃあ無いだろう。
俺はキンジと屋上に出ると階段の廂の下には狙撃科のレキがいた。
アリア、レキと知り合いだったのか。

「よう。レキお前もアリアに呼ばれたのか？」

「・・・」

レキさん！ 無視しないで！

レキの肩をぽんぽんと叩くとレキはヘッドホンを外してこちらを見上げてきた。

「久しぶりだなレキ、お前もアリアに呼ばれたんだろ？」

「はい」

抑揚のないレキの声

「いつも何の音楽聴いてるんだ？ お前」

「音楽ではありません」

「じゃあなんなんだ？」

キンジも興味があるのか聞いてくる

「風の音です」

分からん・・・

レキはドラグノフ狙撃銃を肩にかけなおした。

「時間切れね」

通信を終えたアリアが俺達の方に振り返る。

「もう一人ぐらいSランクがほしかったとこだけどほかの事件で出払ってるみたい」

アリアの中では俺とキンジはSランクなんだな・・・

それにしても何の事件なんだろう。

Sランク扱いするやつを4人も集めるなんて大きな事件なんだろうな・・・

第12話 バスジャック

「バスジャックだと！」

俺はいまヘリの中にいる。

装備の確認をしつつ俺達はエリアに状況を説明してもらっていた。

「武偵高の通学バスよあんた達の寮の前に7時58分に止まったやつ」

ハハハ、俺達を置いていった天罰だな武藤め！

「犯人は車内にいるのか？」

かなりまずい状況だと理解したのかキンジが尋ねる。

「分からないけどたぶんいないでしょうね。バスには爆弾が仕掛けられてる。たぶん自転車に爆弾を仕掛けた犯人と同一犯でしょうね」

「丁度いい。俺もあの犯人は捕まえてやりたいと思ってたんだ。

それにしてもどうやってこの情報を掴んだんだ？ 東京武偵局は動いてるのか？」

「奴は毎回減速すると爆発する爆弾を仕掛けて自由を奪い、遠隔操作でコントロールするの。でも、その操作に使う電波にはパターンがあつて今回もその電波をキャッチしたのよ。東京武偵局は動いてるわでも相手は動き回るバスよ？ 準備が必要だわ」

「でも、武偵殺しは逮捕されたはずだぞ？」

「それは真犯人じゃないわ」

どうしてそう断言できるんだアリア？

こうして事件は起こっているがまだ模倣犯の可能性もある。

「とにかく！ 事件はもう発生してる！ ミッションは車内の全員の救助！ 以上！」

「リーダーをやりたきゃやれ！ リーダーならそれらしくみんなに説明し……」

「武偵憲章1条『仲間を信じ仲間を助けよ』！ 被害者は武偵高の仲間よ！ それ以上の説明は必要ないわ」

アリアはキンジの言葉を遮り言い切ってしまう。
ハハ、諦めるキンジ。

この子はもうとまらなさそうだぜ？

「とにかく、全員救出すりゃあいいんだろ？ キンジよかったじゃねえか大事件だぜ」

「キンジこれが約束の最初の事件になるのね」

キンジはがつくり肩を落としながら

「大事件だな、俺はとことんついてないよ」

「約束は守りなさい。 あんた達が実力を見せてくれるの楽しみに

してるんだから」

俺は大丈夫なんだが・・・この状況じゃキンジはなあ・・・俺はキンジに『いいのか』とアイコンタクトで尋ねると『いいんだよこれで』と無言で返してきた。

「見えました」

レキの声に俺達は防弾窓の下を見る。

台場の町が見えるがバスなんてどこにも見えない。

「レキ、どこだ？」

「ホテル日光前を右折してるバスです。窓に武偵高の生徒達が見えます」

「よ、よく分かるわねあんた。視力いくつよ」

「左右ともに6、0です」

「すげえ・・・と俺が関心していると
アリアが作戦を説明する。

「パラシュートでバスの上に降りるわ。あたしはバスの周囲を警戒、キンジは車内で状況を確認、報告して。誠とレキはヘリで待機」

なるほど遠距離でも援護できる俺とレキは万が一の見張りつてことか。

キンジとアリアは強襲用のパラシュートを使いバスの上に降りた。

キンジが失敗して落ちそうになったところをアリアが助ける。

『ちよっと・・・ちゃんと本気でやりなさいよ!』

『本気だつて・・・これでも今は』

無線は常時つないであるのでそこからキンジとアリアの声が聞こえてくる。

『キンジ、誠どう?　ちゃんと状況を報告しなさい』

『お前の言つたとおりだったよ、遠隔操作されてる』

「こつちは今のところは問題なさそうだ、そつちはどうなんだ?」

『バスの下にプラスチック爆弾があるわ、炸薬の容積は3500立方センチはあるわ』

やべえなそりゃ　電車でも吹っ飛ぶ量じゃねえか。
バスがビルに隠れてヘリから見えなくなったとき

「やばい、アリア後方から!」

「え?」

キンジの警告とアリアの戸惑いの声が通信機から聞こえてくる。

やっとバスが見えたときには一台のオープンカーがバスから距離をとっているところだった。

追突したのか?　よく見ると人が乗るべき場所に俺を襲ってきたあのサブマシンガンがある。

やばい

「キンジ伏せろ！」

無線から聞こえたのかバスの乗客がみんな伏せた。その瞬間にサブマシンガンが車内にぶち込まれる。

「ちっ」

すぐさま目をつぶり精神統一するがこの雨で風が吹き荒れてるなかじゃ風を読みきれない。

しかたねえ、と俺が指をパチンとならすとバスの後ろのオープンカーの銃と前のタイヤが弾け飛んだ。

車はスピンをはじめガードレールに激突　ドンという爆発音とともに炎上した。

「キンジ、アリア大丈夫か？」

『ヘルメットが割られたけど大丈夫よ』

『こっちは運転手が被弾した、今武藤に運転代わってもらってる』

だがバスはもうレインボーブリッジに入っている。　こんなのが都心で爆発したら大惨事だぞ！

キンジがバスの屋根に上ってくる。

何やってんだあいつ

「キンジ今すぐ車内に戻れ！　ヘルメットも無いのに危険だ！」

キンジはアリアのワイヤーを引き上げているところだった。

その後ろから猛スピードでルノーが突っ込んで来る。
やばい、間に合わねえ

「後ろだ！」

俺が叫ぶがキンジはなにはなにやら分かってなさそうだ。

『伏せなさいよ！ 何やってんの馬鹿！』

アリアがキンジにタツクルした。

アリアはそのまま動かない。

『アリア アリアああっ』

キンジの叫び声がここまで聞こえてくる。

くそ、ドンドンドン ルノーは破壊したが間に合わなかった。

「レキ！ 爆弾を頼む！」

「私は一発の銃弾」

レキの狙撃するときのお決まりの台詞だ。

「銃弾は人の心を持たない。 故に、何も考えない」

「ただ目標に向かって飛ぶだけ」

銃声が3発

何かの部品がバスの下から落ちて後ろの道路に散らばっていく。

「私は一発の銃弾」

続いて一発

ギン、部品から火花が上がり宙を飛びさらには中央分離帯も越えて海に落ちていった。

遠隔操作されていたのか、海に落ちた爆弾は巨大な水しぶきをあげた。

さすがだな、レキ

俺はすぐさま救急車を呼ぶ。

無事でいてくれよアリア・・・

第13話 新たなる任務

アリアはあの時キンジをかばって額に銃弾を受けたらしい。らしいというのは俺自身が本人に話を聞いてないからだ。何でもその額に受けた傷はどうやっても痕が残るみたいなのだ。女の子にはキツイ傷だと思うなんせ一生残るのだからな。見舞いぐらいはちゃんと行ってやるかと俺は思っていた。しかしそれは叶わなかった。

そして俺は今学園都市に戻ってきている
というが無理やり連れて行かれた。

あの野郎なにが『はいはい誠くんお仕事ですにゃー』だ！
俺はアリアが病院に連れ見舞いに行く途中に強引に連れ戻されたのだ。

ちよっとはこっちの都合も考えるよな。

「機嫌直せよ、一日ぐらいで終わる任務だからにゃー？」

「何で疑問系なんだよ！　ところで任務ってなんだよ」

「学園都市に侵入した敵の殲滅だ。　なあに誠なら簡単だろ？」

ほんとに簡単に言ってくれ。

俺を呼び戻すぐらいだ、そんなに簡単に倒せる敵じゃないだろうに。
俺達はファミレスに入るとそこのはすでにメンバーはそろっていた。
メンバーといっても一人なのだが

「ンだよっときやがった。　おせエンだよ三下がア！」

いすに腰掛けてコーヒをすすっている全身真っ白で赤い目をしたこいつは一方通行。アクセラレータ 学園都市第一位の能力者でベクトルを操る能力を持つ。

「相変わらずだなお前は、打ち止めちゃんは元気か？」

「うるせエ、お前には関係ねエだろオが」

「はいはい、そこまで！ そろそろ行くぜい」

入って間もないファミレスから出た俺達は近くの空き地に止められていたヘリコプターに乗り込む。

中はなかなかの広さで10人は軽く乗れそうだ。

壁にはM4やM60などの銃が大量に立てかけてある。

「こんなに大量の銃いるのか？」

俺が聞くと、金髪にグラサンのアロハシャツを着た男 つちみかどもと 土御門元春は銃の一つを手に取りながら答える。

「言ってなかったか？ 今回の敵は約3000人だ」

「はあ！？」

さらっと告げた土御門に俺は啞然とする。

3000人っておま、物理的に3人じゃ無理だろ。どこの軍隊だよ

「一方通行は都市内を、俺はここからサポートする 誠は都市外周の奴らを頼む 作戦開始は5分後だそれまでに準備を頼む」

俺は手榴弾を10個ほどポケットに入れM60をもって待機する。もちろん背中には刀、ホルスターにはガバメントとDEが入っている。

「準備できたぞ 土御門」

「早いな誠、ちよつとまで」

土御門はボタンを操作し扉を開ける。そこから外をのぞいて見る。どうやらもう都市の外周まで来ているみたいだ。

「少し早いがお前早く戻りたいんだろ？」

「ん？そうだが・・・」

「なら……行つて来い！」

ドン、と俺は外にたたき出された。

俺の体が急降下を始める。

「終わったら帰っていいからにやー」

上から聞こえる土御門の声

「覚えてやがれえええええ！」

俺は叫びながら地面に向かって落ちていくのだった。

第14話 現れた仇

やばい、早く能力使用モードにならねえと

どんどん地面に近づいているなか俺は目を閉じ精神統一を始める
ふわっ、と急に落下速度が落ち音も無く地面に到達する。

俺は木の生い茂る広い森に落とされた。

「まったくあの野郎 死んだらどうするんだ！」

まったく、もうちょっと場所考えておとせよな

俺が愚痴っていると周囲から敵の気配が。

500つてとこか・・・俺は風の能力を応用し周囲に探知結界のよ
うなものを張ることができる。

この中にいる奴は少しでも動けば俺にその情報が伝わる。 最大範

囲は2キロちよつとだが、

現在周囲にいる約500の敵は300メートルほどの距離を序所に
詰めてここに向かっていてる。

来るなら来い、ぶっ潰す！

ドドドドドドドン・・・

敵との交戦が始まった。

飛んでくる銃弾をかわし、あるいは超能力を使って軌道を捻じ曲げてそらす。

「（こいつらに銃なんか使っても拉致があかねえ・・・使うか？）
」

俺はM60を地面に捨て刀を抜く。

「えんよう
炎陽」

パチン、俺が指を鳴らした刹那 前方の敵がまとめて吹き飛ぶ。

これは風的能力で集めた大量の酸素を俺の火で引火、爆発させる技だ。

普段人に対して威力を加減するのは難しいが・・・今回の任務は敵の殲滅。

加減の必要はない。

パチパチパチパチ、連発する。 飛んでくる銃弾は刀で切り落とす

ただ連発。

辺りはもう火の海だ。

すでに初め500人だった敵ももう残りは数人。

楽勝だな

そのまま倒して行き敵は残り一人となった。

「あんだで最後だ、おとなしく殺られてくれや」

パチン、俺が指を鳴らすと同時に 敵は炎に包み込まれる。

ごう、辺りに風が吹き荒れ炎を吹き飛ばす。

「なっ!？」

風を纏い中から出てきた男が握っているのは一本の刀
真っ黒な刀禍々しいそれはどこか懐かしい。

俺はその刀を知っている・・・?

「その程度か? 杉崎誠、そんなんじゃ死ぬなお前もその仲間も」

「お、お前は一体何者だ!」

「分からののか? これを観ろ!」

突風が吹き荒れ、男は紫の炎を纏う。

あの炎は・・・

忘れもしない俺が5歳のころ父さんと母さんを焼き尽くしたあの炎だ。

「まだ分からののか、お前の父と母を殺したのはおれだ」

男のその言葉によりそれは確定する。

こいつが父さんと母さんを・・・

「ああああああああああああああああああ」

俺は怒りに我を忘れ切りかかる しかしそれは軽く交わされる。
空気の抵抗をなくした限りなく音速に近いそれを男はいとも簡単に
よけ続ける。

ホルスターからDEを取り出し弾が無くなるまで連射。
至近距離で撃ったにもかかわらず男は銃弾を全て切り落とす。

男と俺の刀がぶつかる、そのまま鏢迫り合いなる。
ギン、押し負けた俺は男が放った炎をまともに受ける。
そこで俺の意識は途切れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1022y/>

緋弾のアリア ～黒き疾風～

2011年11月29日17時56分発行